# 『空華集』の絶句における「茶」の表現
## ―空間の変化をめぐって―

台湾大学日本語学科　修士二年　胡 睿慈

要旨

『空華集』は五山文学の双璧の一人と認められる義堂周信（一三二五―一三八八）の詩文集である。主に絶句を収めた巻一から巻六において、「茶」をテーマとし、或いは「茶」を一つの表現として使った作品は 30 首がある

芳賀幸四郎氏は『わび茶の研究』の中、中世に入ると、茶は「睡魔を退治する覚醒剤」の効能だけでなく、「趣味的な嗜好飲料」として愛飲されている[1]。また、南北朝時代の詩人たちの茶に対する考えについて、氏は義堂周信、及び同時代の虎関師練、明極楚俊の茶詩を例として挙げ、主に「神仙思想」における「羽化登仙」に注目して、禅の思想はより少ないことを指摘した[2]。

周信の茶詩を読み解いてみると、現実から夢、或いは、現実から仙境に渡る異質の空間の変化は常に見られている作詩方法である。また、広い空間から狭い空間へ、外から内に、或いは空間における時間的な長さの変化という描写はよく見られる。これは茶によって仙境に渡れる認識から影響を受けたと考えられる。また、絶句における「茶」は、主に音、香りという無形の形で、空間転換の中間媒介として扱っている。本報告では、周信の茶に関わる絶句における空間を把握して、周信の茶の表現を分析してみたいと思う。

---

[1] 芳賀幸四郎（1978）『わび茶の研究』、淡交社：ｐ23

[2] 同注 1